

下克上寝取られ

「許して、だってあなたチ○チン小さいから」

元女子アナの美人妻貞子が、

天才野球選手の夫の租チンより

ボンクラニートの巨根を選ぶ。

【NTR】 【短小責め】

玉子王子 著

1章 愛妻に捻じ込まれていたのは自分よりはるかに巨大なデカチ○コ

記者会見。

かなり大勢のメディア関係者が入れる大きなホール。

記者たちの前には、爺さん一人、おっさん三人、そして若い男、野球選手清田の姿があった。

清田は、半年ほど前に問題を起していた。

不倫騒動に引っ掛け、元アナウンサーの妻が昔男癖が悪かったが今は大丈夫か、というような質問をされて、リポーターを殴ったのだった。

今、やっと謹慎が解けて復帰の会見を行っている。

清田は今、三十歳で三億円プレーヤーだ。

一説には日本のチームには、一億円越えの人間は一チームに二、三人という話なので、三億円の清田はまさしくスターだった。

それも過去の栄光による人気への支払いという面はない、今の実力への金。

もちろん、実力があるだけに人気もある。

彼は投手で、去年の防御率は脅威の二点。

打者としても通用する腕前で、ホームラン五十本をかつ飛ばした。

高校野球でいい学校に当たったのでちゃんとしつけもされており、人間的にも問題ないと見なされていた。

それが美人アナウンサーと結婚したのだから、まさに誰もが夢見る人生を生きているといえる。

それが半年前に多少暗転したものの、すぐに立ち直るのは間違いないと見られていた。

机の前を司会者が横切る。

と、彼の足が机にあたる。

カラン、と清田が持っていたコップが音を立てて転がり、ズボンに水を掛ける。

「あっ、すいません」

言ったのは、清田だった。

「いや、なんでですか？」

司会者が余計に恐縮する。

が、清田は謝る。

——俺がちゃんと持っていればよかったんだ。

清田とは、こういう悪くなくとも謝るタイプだった。

責任感が強い、というのだろうか。

記者会見がはじまり、進んでいく。

「それでは、悪かったと思っているんですね？」

ある程度おっさんたちと受け答えしてから、リポーターが清田に尋ねる。

もちろん、思っていると答えるように弁護士には言われていた。

マイクを握り、立ち上がる。

そして口を開く。

「いや、全然思ってません。妻を侮辱されたんだから、あのぐらい当然です」

ざわ、と一瞬ざわめくメディア関係者。

すぐに、怒号の嵐となる。

「なんだそれは！」

「反省の色がないぞ！」

「ジャーナリスト様を殴るなんて、言論弾圧だ！」

怒号。

その中で、先ほどから黙っていた、机の端の方に座っていた老人が目を開ける。

「クソ虫」

一瞬で、静まり返るマスコミ関係者たち。

「クソ虫ども、こいつを誰だと思っている？」

彼が目を向けると、マスコミ関係者は目を伏せる。

「ワシの球団で、去年ホームラン五十本を打った男だぞ」

「いや、でもそれは……」

「ホームランは全てを肯定する！」

バン、と机を叩く。

彼は清田の所属する「うさぎ新聞ラビッツ」のオーナーであり、うさぎ新聞の社長でもある。

ラビッツなどどう考えても弱そうな名前だが、資金力に裏打ちされた実力は球界最高峰。

そしてうさぎ新聞は発行部数十億部という明らかな嘘を公称する日本最大の新聞社である。

その二つのトップである老人は、球界とマスコミ界のドンと噂されるフィクサーだった。

「清田は今日から復帰する。文句がある者は手を挙げろ」

静まり返るマスコミたち。

立ち上がる老人。

清田の肩を叩く。

「そういうことだから、試合がんばってな」

「ありがとうございます！」

こういう抑え方ははたして「ありがとう」といえるのか、かなり微妙だが清田の表情は明るかった。

——これで貞子にいい報告が出来る。

清田貞子、元女子アナで清田の妻。美人が多いプロ野球選手の妻の中でもトップ五に入るといわれている。

それは実際に美人であると言うのもあるが、清田の異常なほどの熱愛というか執着があり、それだけ愛されるのだからというイメージで下駄を履かされている面も多々あった。

必要以上に謝るタイプの清田が、妻のこととなると見境がなくなる。

今日は復帰発表の後、球団の関係者を回る予定だ。

が、清田は勝手にキャンセルというか、すっぽかして家に向かう。

——貞子は心配してるだろうからな。復帰のことは直接報せてやりたい。そしてその場でセックスだ。

体力自慢の清田は、一緒に寝るときは毎日でもセックスし、一度に五回はやる。

——毎回イキまくるんだ、感度がいいからな、貞子は。

演技かも、などと欠片も想像もしない人のいい男だった。

家はタワーマンション。

地震で危ないのに高いという上の階だ。

馬鹿馬鹿しい、と清田は思う。

——上が崩れてきたら下も終わりだろうが。なら同じだ同じ。

いや、同じなら高い上はやはり損ではないだろうか。

まあ、崩れるまでは見晴らしがいいとは言える。

呼び鈴も押さず、扉を開ける。

「お、客か」

玄関に置かれている靴は、古ぼけた男物のスニーカーだった。

清田の靴の三分の二ぐらいの大きさで、相当体格的に劣ることもわかる。

——おいおい、これ十年ぐらいはいてるんじゃないか？ んなことしてる貧乏人がうちになんのようにだよ？

不思議に思ったことで、ただいまというのを忘れる。

そのまま、中にはいっていく。

ここで声をかけていたら、少しは未来が変わっていたかもしれない。

「ん……」

足を止める。

「あっあっあっ……ああんっ！ ハルクんいっ、そこ、そこもっ、おおっ。気持ちいい、おチ○チン気持ちいっ」

甘ったるい、喉の奥に竦ったような喘ぎ声。

聞き覚えのあるものだった。

明らかに、貞子のもの。

「な、なんだ？」

浮気。

信じられない。

朝起きたら重力が反対で天井を歩く事になることがあるだろうか？

あるわけがない、それほどありえないと清田は思っていた。

それでも、足音を消して声に近付く。

居間。

広く、絨毯敷きで大きなソファもある。

よく夫婦でセックスしている部屋。

まだ子供がいないので、自由も利く。

部屋の戸は開いていた。

覗く。

息が詰まる。

妻は、机に手を突いていた。

そして肉のスイカのような乳房をブルブルと揺さぶりながら、丸々とした桃尻をプリンと後ろに突き出し、悩ましげに振る。

そこに取り付く男。

不摂生で、腹の肉がついている。太股もたるみ、二の腕も、顎の下の肉もみっともないことこの上ない。

——な、何だあの男は……！

頭に血が上る。

同じようなスポーツ選手、あるいは見栄えのいいホスト、芸能人。

そんな男が妻の尻に取り付いているなら、まだ冷静でいられた。

しかし、今妻に向けて腰を振っている男は何だ。

靴や、その辺に置かれている服からみて、明らかに金持ちではない。

そしてその体は、内面のいい加減さ、自制心のなさがにじみ出ている。

——明らかに三流以下の男だ。一生童貞の……

それが、元美人女子アナウンサーで一流野球選手の妻に腰を振る。

許しがたい。

廊下に目をやる。

野球選手であるから、バットぐらい置いてある。

手を伸ばす。

「あっ、あっ！ いいっ、ハルくんエッチうまいっ！」

スイカップを揉み上げ、乳首を転がすハル。

腰の動きもまったく止めない。

ダブダブに余った腹の肉が、形のいい桃尻の上に覆いかぶさる。

——醜い。醜すぎる。あんな奴が、許せん……

扉に手をやる。

本当に、肉が余った男だった。

腹、太股、二の腕、先ほどから見ている間にも、増えているように清田には思えた。

そして、前。

男の部分にもみっともないほど大量の肉がついている。

恐ろしいほど大量に肉がついて、太股の間にぶら下がり、また、棒状に丸まって妻の尻に突きつけられている。

いや、女のもっとも隠すべき部分に突き刺されている。

ジュブリジュブリとそれが音を鳴らすたびに、妻の横顔が蕩け、舌を突き出して声を上げる。

「んんおおおっ！ いいわあ、いいわあ！」

——あ、あんな顔するのか？

上品な妻は、絶頂のときもさほど顔を歪めたりはしない。

そう清田は思っていた。

それが今はどうだ、下種な売女のように、男のものを受け入れる喜びに打ち震えている。

——な、なんていい顔。

唾を飲む。

男は、女を喜ばせれば自分も嬉しく、興奮するものだ。

横から見ているだけでも、そのお零れはある。

清田は気づく。自分の股間がガチガチに怒張している事に。

ズボンの上から握る。

立っても包茎のままの、「このぐらいでもセックス可能だから大丈夫」と励まされねばならない大きさの一物を。

目を二人にやる。

「ああん！ おマ○コいいっ！ チ○チン、チ○チンもっと！ 大きいハルクンのおチ○チンもっとジュボジュボして！ エッチな人妻の貞ちゃんにおチ○ポ入れて！」



「定ちゃん！ 俺のと、旦那のとどっちがいい！？」

「やだ！ いつも言ってるでしょ！ それだけはいえないって！」

唾を飲む清田。

いつも言っている。

それほど、関係しているというのか。

それでも、内心ほっとする。

ハルの男根は巨大の一言だ。

男として、あらゆる面で勝っているつもりの清田。

年収でも経歴でも、背の高さでも、見栄えでも。

何でも勝っている。

ただ、男のシンボルだけは……

それを、妻が言わないでくれる。

わかりきっていても、言わないで庇ってくれる。

それが涙が出るほど嬉しかった。

このまま立ち去ろう、と思う。

内心、恐れていた。

ここで割り込み、妻がギリギリの所で相手のシンボルを選ばないかと。

一物に圧倒的大差がなければ、すでに清田は踏み込んで間男を殴り倒していただろう。

自分と別れたら、一気に貧乏暮らしだと責めれば妻もなくて謝るはずだ。

だが、それが出来なかった。

——くそ、チ○ポぐらいどうでもいいはずだ。

それでも、踵を返そうとする。

その背に、叫び声。

「やあんっ！ やめないで！」

「へへ、それじゃ、言ってくれよ」

清田の背で、扉の隙間の向こう側で、ハルが腰を振るのをやめていた。

焦らすように尻を撫でる。

汗だくの顔で、頬を膨らませる貞子。

「もう！ なら言ってあげるわ。私の夫はハルくんより背も高いし運動も出来るし、ニートのハルくんとは比べられないほどお金持ちよ！」

「それで？」

振り返る清田。

劣等感を覚えた顔がみたかった。が、ハルの太りきった顔は平然としたものだった。

妻が、肉の柱をくわえ込みながら膨れっ面で振り返る。

「だけど肝心の下半身がダメ！」

「おお、野球選手なのに足が遅いんだ」

「違うわよお！ もう、知ってるでしょ？」

「なかなか信じられないんだよな、何回聞いても。あの清田青次選手のバットが小さいなんて」

キュ、と肉玉が縮むのを感じる。

息が詰まる。

——貞子……

庇ってくれる。

そのはずだ、だが、それでもこのやり取りは苦しい。

なのに、もしも庇ってもらえなかったら？

そんなことを考えている清田の耳に、妻の声が入る。

「青次さんのは、小さいってもんじゃないわよ。子供の頃、最後に一緒にお風呂はいったの八歳ぐらいだったよね？」

「かわいかった」

「うふふ、ハルクんのもね。今のハルクんのはド悪魔だけど」

「ド悪魔そらそら」

「いやあああん！ ……で、旦那のはその頃のハルクんのもと同じぐらいなの」

股間がプレス機で勢いよく押し潰される。

それほどの衝撃を感じて、よろめく清田。

それでも、倒れない。

一流プロ野球選手の運動能力は桁違いなのだ。

——お、俺のが八歳ぐらい？

そこまでなのか。

小さいのは自覚していた。だから周りに見られないように、見ないようにして来た。

だが、それほどのこととは。

いや、男を喜ばせるための嘘ではないか。

そう思った時、劇的にひらめいてしまう。

今まで、上品な顔でよがり、イキ顔を見せてくれた妻。

それこそ、演技ではないか。

先ほど、ド悪魔を多少動かされたときに見せた顔は、今まで見たことも無いものだった。

ピストンされているときの顔など、女神めいて見えた。

今まで、全てを見せてくれていたと思っていた。

その思いが、崩れる。

——うそだ、うそだ。演技だとしたら、俺との生活は……

嘘、とまでは言わない。

日々の夫婦としてのやり取りまで、すべて演技だとしたら妻は女優でも成功できるだろう。

だが、セックスのときだけは、仮面を被っていることはありうる。

「結論。青次さんよりハルクんの方がおチ○チンだけは上。それ以外、勝ってる所ないよ」

「だから、セックスだけの付き合いで俺は満足だよ」

「うふふ、夫としては、断然青次さんなの。お金も持ってるし、頼りにもなる。自慢も出来る。ハルクんとじゃ、もうまったく釣り合わないわ」

流石に多少はつらそうな顔を見せるハル。

が、諦めきった笑みをすぐに浮かべる。

「チ○ポだけでも採用されてよかったよ」

「そうね。アソコが反対だったらあんまりにもかわいそうだったわ」

「想像させんなよ。俺のがクツソ短小包茎チ○ポで、俺のデカブツを清田選手が持ってるなんて」
「そこまで世の中不公平じゃないってことね。うふ、じゃあ再開ね、おチ○チンだけドラフト一位さん。あ、いいんっ！ もっとついて、もっと！ デッカイおチ○ポで！」

「ほらほら！」

「いいわっ！ 今日は絶対青次さん盛り上がるから、付き合うの大変なのよ！ その分今楽しんで我慢できるようにしないとね！ デ○チンパワー充電して！」

息が詰まる。

コン、とバットが床を軽く叩く。

手が弛んで、落としてしまった。

すぐに拾ったが、音は部屋の中に聞こえたのではないか。

もし、妻がこちらに気づいたら。

どう考えても、負い目を持つべきは相手のはずだ。

なのに、いまや気づかれることは清田にとっては恐怖だった。

体験版終わり

いかがでしたか？

これから徐々にお互いの事に気づいて危険な領域に突入していきます。

よろしければ、製品版で続きをどうぞ。

見下していた弱者にチ○ポで完敗し、愛する女を寝取られる！ 野球選手の主人公は短小包茎、ある日家にかえると見るからに無能そうなデブが愛する妻を巨根で抱いていた！